



アセンブリ言語

x86-64 機械語命令(1)

情報工学系 権藤克彦



x86-64機械語命令の特徴

- CISC (complex instruction set computer)
 - 1つの命令で複雑な(複数の)処理。cf. MIPSはRISC
 - 直交性が低い(レジスタやアドレッシングモードの).
 - 汎用レジスタの数が少ない.
 - アドレッシングモードが複雑.
 - cf. RISCのload/storeアーキテクチャ.

商業的に 後方互換性大事.

- 2アドレスコード (オペランドは2つが基本)
 - 。例:addq %rax, %rbx # %rbx+=%raxの意味
 - cf. MIPSは3アドレスコード。
 - 例:add \$s0,\$s1,\$s2 # \$s0=\$s1+\$s2の意味
- 可変長の命令:1~15バイト
 - cf. MIPSは固定長で4バイト. (RISCの多くは固定長)



この資料で

- 学ぶこと
 - 。アドレッシングモードと主な非特権命令(64ビットモード)
 - 。 関数呼び出し(スタックフレームの構造)
 - コンパイル例で見る、機械語命令の使用例
 - 。 Intel形式とAT&T形式の違い

- 学ばないこと
 - 。 特権命令, 浮動小数点命令, 入出力命令, 拡張命令

アドレッシングモードと 主な非特権命令 (64ビットモード)



アドレッシングモード

- オペランドの記法を指す.
 - 。 元々はメモリのアドレスの記法を指す言葉.

ラベル=アドレス

アドレッシング	オペランドの値	例
モード		
即值	定数の値	addq \$0x100, %rax
		addq \$_foo, %rax
レジスタ	レジスタ中の値	addq %rbx, %rax
メモリ	定数アドレスで指定された	addq 0x100, %rax
(直接アドレス指定)	メモリ中の値	addq (0x100), %rax
		addq _foo, %rax
メモリ	レジスタ中の値(アドレス)	addq (%rbp), %rax
(間接アドレス指定)	で指定されたメモリ中の値	addq -4(%rbp), %rax
		addq _foo(%rbp), %rax



メモリ参照(1)

info as では section, Intelマニュアルでは segment. セグメントレジスタで指定する. セグメントレジスタはほぼ不使用

	メモリ参照の形式	
AT&T形式	section: disp (base, index, scale)	
Intel形式	section: [base + index * scale + disp]	

実効アドレス(アクセスするメモリアドレス)は section: (base + index * scale + disp) で計算.

メモリ参照の例

AT&T形式	Intel形式	説明
-4(%rbp)	[rbp - 4]	dispとbase
foo(,%rax,4)	[foo+rax*4]	dispとindexとscale
foo(,1)	[foo]	dispとscale
%gs:foo	gs:foo	section と disp

GNU アセンブラ C言語 \$foo foo foo *foo

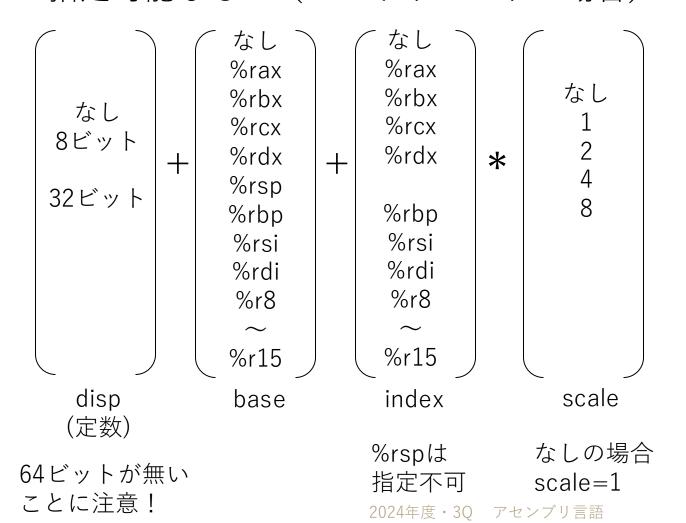
displacement(変位) =相対アドレスを表す符号あり整数定数値



メモリ参照(2)

disp (%rip) という形式も可. dispは32ビット. アドレス計算時に64ビットに符号拡張

指定可能なもの(64ビットモードの場合)

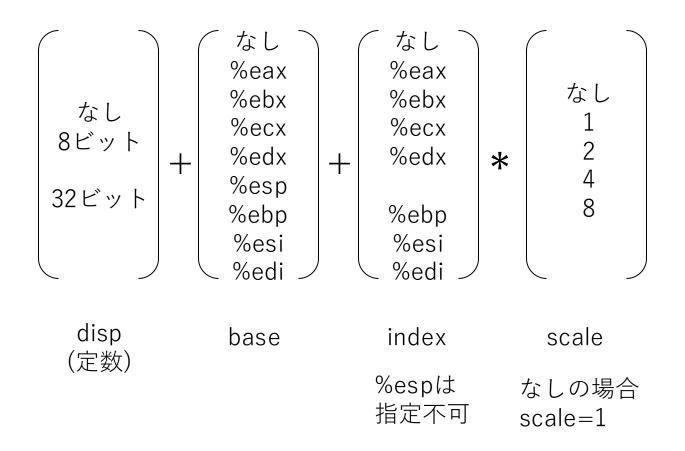


7



メモリ参照(3)

指定可能なもの(32ビットモードの場合)

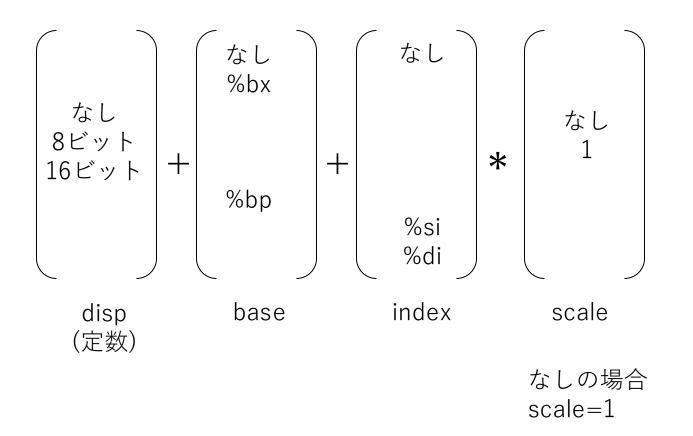




メモリ参照 (4)

かなり制限が厳しい

• 指定可能なもの(16ビット保護モード, リアルモード)





このスライドで勝手に

命令表で使うオペランド省略記法

省略記法	Intelマニュアルの記法	例	説明
imm	imm8, imm16,	\$1234	8, 16, 32, 64ビットの即
	imm32, imm64	\$_foo	值 (immediate value).
r	r8, r16, r32, r64	%rax	8, 16, 32, 64ビットの
			汎用レジスタ.
r/m	r/m8, r/m16,	%rax	8, 16, 32, 64ビットの
	r/m32, r/m64	1234	汎用レジスタか
		(reax)	メモリ参照.
		4(%rbp)	
Sreg	Sreg	%ds	セグメントレジスタ

op1	第1オペランド(AT&T形式で)
op2	第2オペランド(AT&T形式で)



nop命令

%rflagsに影響無し.

- nopは何もしない命令(%ripだけが進む).
 - 使用例:コード中のパディングとして使う。
 - RISCでは遅延分岐スロットに使う. MIPSでの例:j Label; nop
- nop命令は1バイト長(0x90)と多バイトのものがある.

文法	例	説明
nop	nop	何もしない(1バイト長)
nop r/m	nopw 4(%rax)	何もしない(多バイト長)



89

8B

b8

c7

mov命令: データ転送 (コピー) (1)

- movは第1オペランドの値を第2オペランドにコピー。
 - 。 メモリからメモリへの直接コピーはできない.
 - 。 %rflags のフラグは変更しない.

文法	例	説明
mov r, r/m	movq %rax, %rdx	%rdx=%rax
	movq %rax, 4(%rbp)	*(%rbp+4)=%rax
mov r/m, r	movq 4(%rbp), %rax	%rax=*(%rbp+4)
mov imm, r	movq \$999, %rdx	%rdx=999
mov imm, r/m	movq \$999, 4(%rbp)	*(%rbp+4)=999

注意:b8は imm64あり, c7はimm64なし (imm32まで)

注意:異なるオペコードで同じ動作のmov命令あり.

48 89 C3 48 8B D8

movq %rax, %rbx



重要:他の命令でも同様にいろいろ試すこと

確認: movq命令を実行

```
.globl _main
.text
_main:
movq $999, %rax
retq
foo.s という
ファイルで保存
```

出力を大幅に省略

```
% gcc -g foo.s
% IIdb ./a.out
(IIdb) b main main関数の最初にブレーク(実行一時停止)設定
(IIdb) run 実行開始
a.out `main:
-> 0x100003fb1 <+0>: movq $0x3e7, %rax movq前で停止
 0x100003fb8: addl %eax, (%rax) これはゴミ
(IIdb) si 1命令だけステップ実行
Process 9847 stopped
* thread #1, queue = 'com.apple.main-thread', stop
(IIdb) p $rax %raxの値を表示
(unsigned long) $1 = 999 999が入っていた
(IIdb) quit
%
                        2024年度·30
```



.text

確認:機械語命令2進数直書きでも同じ

• コンパイラは、命令が短い方(または実行速度が 速い方)を自動的に選択。



xchg:オペランドの値を交換

- xchg命令は2つのオペランドの値を交換する.
- lock xchgはアトミック→同期機構の実装に使用可.
 - mov命令はアトミック性を保証していない.
 - 「アラインメント制約を満たせば保証される」とよく言われるが…
 - ・ ページ境界をまたぐmov命令は明らかに保証されない
 - アトミックな命令は実行途中で割り込まれない。
 - 。 実はlock つけなくても特別にアトミックになる

文法	例	説明
xchg r, r/m	xchg %eax, %edx	値を交換
	xchg %eax, 4(%rbp)	
xchg r/m, r	xchg 4(%rbp), %eax	

32ビットでは、nop命令は xchg %eax, %eax だった. 64ビットでは、xchg %eax, %eax は %raxの上位32ビットを ゼロクリアするので、もはや nopではない 2024年度・3Q アセンブリ言語



lea: 実効アドレスをロード

- lea = load effective address
- lea命令は第1オペランドの実効アドレスを 第2オペランドに格納」
 - 実効アドレス=実際にアクセスすべきメモリアドレス.
 - 。 lea命令はメモリを読まない.アドレスを計算するだけ.

文法	例	説明
lea m, r	leaq 4(%rbx, %rsi), %rax	%rax=4+%rbx+%rax
	leaq 4(%rip), %rax	%rax=4+%rip

• lea命令を使うと、加算・乗算を高速にできることがある.

leaq 4(%rbx, %rsi, 4), %rax

同じ計算だが、leaを使った方が高速.

%rax mova \$4, addq %rbx, %rax shla \$2. %rsi addq %rsi, %rax

論理左シフト



pushとpop:スタック操作(1)

- push命令はスタックポインタ(%rsp, %sp)を 減らしてから、スタックトップにオペランド値を格納。
- pop命令はスタックトップの値をオペランドに 格納してから、スタックポインタを増やす。

文法	例	説明
push imm	pushq \$999	%rsp -=8; *(%rsp)=999
push r/m16	pushw %ax	%sp -= 2; *(%sp) =%ax
push r/m64	pushq 4(%rbp)	%rsp -= 8; *(%rsp)=*(%rbp+4)

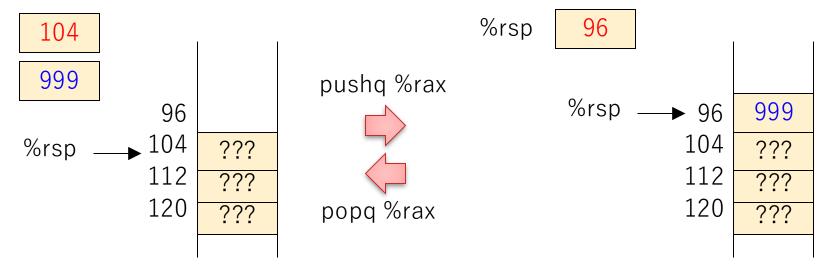
文法	例	説明
pop r/m16	popw %ax	%ax=*(%sp); %sp += 2;
pop r/m64	popq 4(%rbp)	*(%rbp+4)=*(%rsp); %rsp += 8;



pushとpop:スタック操作(2)

• x86-64のスタックは(通常)低アドレスに成長.

%rsp %rax



抽象データ型のスタックとは異なり、movq命令等を使って、スタックトップ以外にもアクセス可能.



算術論理演算

演算の種類	主な命令	
算術	add, sub, mul,div, inc, dec, neg	
論理	and, or, xor, not,	
シフト	sal, sar, shl, shr, rol, ror, rcl, rcr	
比較	cmp, test	
変換	movs, movz, cbtw, cwtd	

• ほぼどれも%rflagsのフラグを変更する.

次の表記で表す.

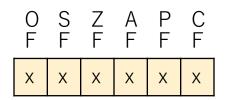
O S Z A P C F F F F F F

(空白)	変更無し		
X	変更あり		
?	未定義		
0	クリアされる		
1	セットされる		

2024年度・3Q アセンブリ言語



算術演算(1)



文法	例	説明				
add imm32, r/m	addq \$123, %rax	%rax $+= 123;$				
add r, r/m	addq %rax, (%rbx)	*(%rbx) += %rax;				
add r/m, r	addq 4(%rbp), %rax	%rax += *(%rbp+4);				
adc op1, op2	adcq \$123, %rax	キャリー付きの加算.				
(addと同じ)	adcq %rax, (%rbx)	op2 += op1 + CF;				
sub op1, op2	subq \$123, %rax	%rax -= 123;				
(addと同じ)	subq %rax, (%rbx)	*(%rbx) -= %rax;				
sbb op1, op2	sbbq \$123, %rax	ボロー付きの減算.				
(addと同じ)	sbbq %rax, (%rbx)	op2 -= op1 + CF;				

imm64 は不可. movabsq で転送して加算する. addq \$0x1122334455667788, %rax とは書けない



算術演算(2)

- subも符号なし・ありを区別しない.
 - 。 両方の結果を生成する.
 - 。 addと同様に、OF, CF, SFで演算結果をチェックする.

movb \$0xFF, %al subb \$0x01, %al

$$\begin{array}{ccc}
0xFF & -1 \\
-0x01 & -1 \\
\hline
0xFE & -2
\end{array}$$

movb \$0x80, %al subb \$0x7F, %al

$$\begin{array}{rrr}
0x80 & -128 \\
-0x7F & -127 \\
\hline
0x01 & -255
\end{array}$$

movb \$0x01, %al subb \$0x02, %al

$$\begin{array}{c}
0x01 & 1 \\
-0x02 & -2 \\
\hline
0xFF & -1
\end{array}$$



算術演算(3)

%rdx:%rax 乗算結果の上位64ビットが%rdxに入り 下位64ビットが%raxに入る

文法	例	説明
		符号なしの乗算.
mul r/m	mulq %rbx	%rdx:%rax=%rax*%rbx;
		符号ありの乗算.
imul r/m	imulq %rbx	%rdx:%rax=%rax*%rbx
imul r/m, r	imulq %rbx, %rax	%rax *= %rbx;
imul imm32, r/m, r	imulq \$4, %rbx, %rax	%rax = %rbx * 4;
imul imm32, r	imulq \$4, %rax	%rax *= 4;
		符号なしの除算.
div r/m	divq %rbx	%rax = (%rdx:%rax) / %rbx;
		%rdx = (%rdx:%rax) % %rbx;
		符号ありの除算.
idiv r/m	idivq %rbx	同上

 div idiv 2024年度・3Q

O S Z A P C F F F F ? ? ? ? ? ?



idiv 使用例

%edxの値設定を忘れないように cltd命令を使うと%edxの設定が楽 %rax なら, cqto

```
.globl _main
.text
_main:
    movl $10, %eax
    movl $0, %edx
    movl $3, %ecx
    idiv %ecx
    retq
```

```
.globl _main
.text
_main:
_movl $-10, %eax
_movl $0xFFFFFFFF, %edx
_movl $3, %ecx
_idiv %ecx
_retq
```

10/3 = 3 が %eax に入る

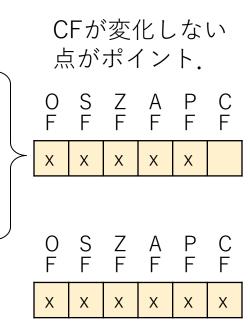
-10/3 = -3 が %eax に入る

デバッガで確認せよ



算術演算(4)

文法	例	説明
inc r/m		1だけインクリメント.
	incq %rax	%rax++;
dec r/m		1だけデクリメント.
	decq %rax	%rax;
neg r/m		2の補数による符号逆転.
	neg %rax	%rax = -%rax;





ビット論理演算

文法	例	説明
not r/m	notq %rax	%rax = ~%rax;
and imm32, r/m	andq \$0xFFF, %rax	%rax &= 0xFFF;
and r, r/m	andq %rbx, 4(%rbp)	*(%rbp+4)
and r/m, r	andq %rax, %rbx	%rbx &= %rax;
or op1, op2	orq %rax, %rbx	%rbx = %rax;
(andと同じ)		
xor op1, op2	xorq %rax, %rbx	%rbx ^= %rax;
(andと同じ)		

not OSZAPC FFFFFF and or xor O S Z A P C F F F F C X O

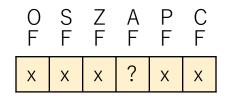


補足

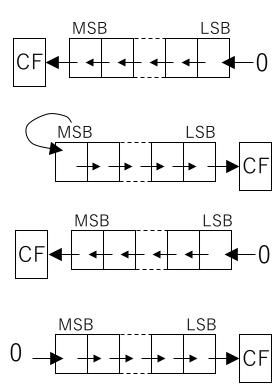
X	у	x & y	x y	x^y
0	0	0	0	0
0	1	0	1	1
1	0	0	1	1
1	1	1	1	0



シフト演算



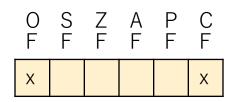
文法	例	説明
sal r/m	salq %rax	算術左シフト
sal imm8, r/m	salq \$2, %rax	imm8回シフト
sal %cl, r/m	salq %cl, %rax	%cl回シフト
sar op1 [, op2]	sarq \$2, %rax	算術右シフト
(salと同じ)	sarq %cl, %rax	
shl op1[, op2]	shlq \$2, %rax	論理左シフト
(salと同じ)	shlq %cl, %rax	
shr op1[, op2]	shrq \$2, %rax	論理右シフト
(salと同じ)	shrq %cl, %rax	



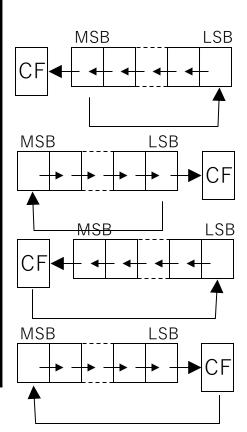
salとshl は同じ動作



ローテート命令



8						
	文法	例	説明			
	rol r/m	rolq %rax	左にローテート.			
	rol imm8, r/m	rolq \$2, %rax				
	rol %cl, r/m	rolq %cl, %rax				
	ror op1 [, op2]	rorq \$2, %rax	右にローテート.			
	(rolと同じ)	rorq %cl, %rax				
	rcl op1 [, op2]	rclq \$2, %rax	CFを含めて左に			
	(rolと同じ)	rclq %cl, %rax	ローテート.			
	rcr op1 [, op2]	rcrq \$2, %rax	CFを含めて右に			
	(rolと同じ)	rcrq %cl, %rax	ローテート.			



rotate=回転する. 循環する.



比較命令

フラグ計算だけを行う命令 通常,次に条件付きジャンプ命令が続く

1				_
	文法	例	説明	
	cmp imm32, r/m	cmpq \$123, %rbx		O S F F
	cmp r, r/m	cmpq %rcx, %rbx		x x
	cmp r/m, r	cmpq 4(%rbp), %rbx		
	test imm32, r/m	testq \$123, %rbx		O S F F
	test r, r/m	testq %rcx, %rbx		$\begin{bmatrix} 0 & x \end{bmatrix}$
	test r/m, r	testq 4(%rbp), %rcx		

O F	S F	Z F	A F	P F	C F
X	Х	Х	Х	Х	Х
0	S	Ζ	Α	Р	С

- O S Z A P C F F F F S
- cmp命令はsub命令と同じ. ただし、cmpはオペランドを変更せず、%rflagsだけを変更.
- test命令はand命令と同じ. ただし、testはオペランドを変更せず、%rflagsだけを変更.

cmp ≒ sub test ≒ and



ジャンプ(1):文法

• jmp命令は無条件ジャンプを実行.

rel32は32ビットの 符号付き定数整数値. 相対アドレスを表す.

文法	例	説明		
jmp rel8	jmp 0x10	short, 相対, 直接ジャンプ		
	jmp _foo	(\$はつけない)		
jmp rel32	jmp 0x1000	near,相対,直接ジャンプ		
	jmp _foo	(\$はつけない)		
jmp r/m	jmp *%rax	near, 絶対, 間接ジャンプ		
ljmp m16:64	ljmp *4(%rbp)	far, 絶対, 間接ジャンプ		

相対ジャンプは32ビットのみで、64ビットは無い. 32ビットの範囲を超えるジャンプは絶対間接ジャンプを使う.

保護モードのfarジャンプ(タスクスイッチにも使用)はここでは簡単のため説明していない.

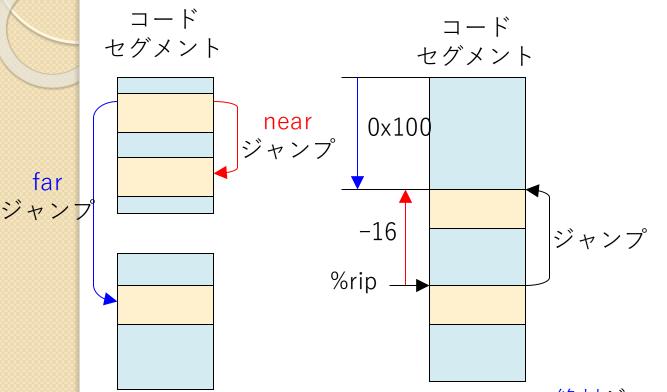
F	F	Z F	A F	P F	F



far

ジャンプ(2):用語

x86-64では, near直接ジャンプは 相対ジャンプのみ.



直接ジャンプ direct jump

jmp 0x1000

定数でジャンプ

間接ジャンプ indirect jump

jmp *(%rbx)

変数でジャンプ

jmp 0x100

絶対ジャンプ absolute jump

jmp -16

相対ジャンプ relative jump

nearジャンプを特に shortジャンプと呼ぶ.

他のコード

セグメント

-128~127の範囲の



ジャンプ(3):文法のおかしな点

- ドル記号(\$)とアスタリスク記号(*)
 - 記法が一貫していない。

jmp _foo jmp *%eax *をつける.

\$はつけない.

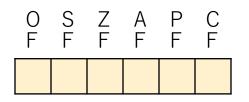
• ジャンプ命令には命令の接尾語(b, w, l, g)をつけない.

imp foo jmp<mark>b</mark> _foo jmpl_foo

OK NG NG



条件付きジャンプ(1)



■ j*cc* は%rflags (CF, OF, PF, SF, ZF) か%rcxを **ノ**チェックして、条件が成り立てば、ジャンプする.

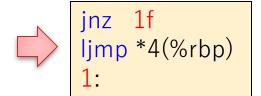
条件付き ジャンプ命令の 総称

文法	例	説明
j <i>cc</i> rel	jg _foo	条件が成り立てばジャンプ

■ j*cc* は cmp と組み合わせてよく使う.

jump if 8(%rbp) > 0

- jcc は far ジャンプをサポートしてない.
 - □ farジャンプをするには、次のようにjccとjmpを組み合わせる.



OK



条件付きジャンプ(2)

使用パターン

cmp op1, op2 j*cc* rel

条件付きジャンプ命令(符号あり整数用)

命令	条件	フラグ	説明
jg	op2 > op1	ZF==0 &&	greater
jnle	!(op2 <= op1)	SF==OF	not less nor equal
jge	op2 >= op1	SF==OF	greater or equal
jnl	!(op2 < op1)		not less
jle	op2 <= op1	ZF==1 SF!=OF	less or equal
jng	!(op2 > op1)		not greater
jl	op2 < op1	SF!=OF	less
jnge	!(op2 >= op1)		not greater nor equal

• less と greater は符号あり整数に使い, above と below は符号なし整数に使う.



条件付きジャンプ(3)

使用パターン

cmp op1, op2 j*cc* rel

条件付きジャンプ命令(符号なし整数用)

命令	条件	フラグ	説明
ja	op2 > op1	CF==0 && ZF==0	above
jnbe	!(op2 <= op1)		not below nor equal
jae	op2 >= op1	CF==0	above or equal
jnb	!(op2 < op1)		not below
jbe	op2 <= op1	CF==1 ZF==1	below or equal
jna	!(op2 > op1)		not above
jb	op2 < op1	CF==1	below
jnae	!(op2 >= op1)		not above nor equal

• less と greater は符号あり整数に使い, above と below は符号なし整数に使う.



条件付きジャンプ(4)

条件付きジャンプ(カウンタ用)

文法	条件	説明
jcxz rel8	%cx == 0	%cxが0ならジャンプ
jecxz rel8	%ecx == 0	%ecxが0ならジャンプ

- jcxz と jecxz はshortジャンプだけサポート.
- つまり, ジャンプ範囲は-128~127に限定. 使いにくい.
 - 同じ理由で loop命令も使いにくい。

警告が出ない場合も!

NG

jecxz _foo
.space 256
_foo:

% gcc -c foo.s foo.s:unknown:Fixup of 256 too large for field width of 1 %



条件付きジャンプ(5)

• 条件付きジャンプ (フラグ用)

命令	フラグ	説明
jc	CF==1	carry
jnc	CF==0	not carry
jo	OF==1	overflow
jno	OF==0	not overflow
js	SF==1	sign
jns	SF==0	not sign

命令	フラグ	説明
je	ZF==1	equal
jne	ZF==0	not equal
jz	ZF==1	zero
jnz	ZF==0	not zero
jpe	PF==1	parity even
jpo	PF==0	parity odd
jp	PF==1	parity
jnp	PF==0	not parity

● 関数呼び出し (スタックフレームの構造)



プロセスのメモリレイアウト

.text

.data

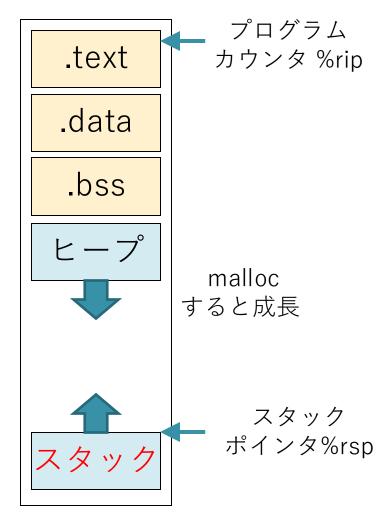
.bss

機械語命令列

静的変数 (初期化済み) 静的変数 (未初期化)

実行可能ファイル a.out

> 関数呼び出しで 成長



ユーザプロセスの メモリ

2024年度・30 アセンブリ言語



call, ret, enter, leave (1)

O S Z A P C F F F F F F

near の場合

- call fooは次の2動作を実行.
- pushq %rip (スタック上に%ripの値を退避)
 - 2. movq \$_foo, %rip (_fooにジャンプ) 🦠
- call命令の 次の命令を指す

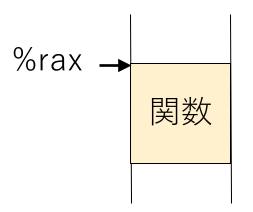
- ret は次の動作を実行。
 - 1. popq %rip

8			
	文法	例	説明
	call rel32	callq _foo	near・相対・直接の関数呼び出し
	call r/m64	callq *%rax	near・絶対・間接の関数呼び出し
	call m16:16/32	Icallq *4(%rbp)	far・絶対・間接の関数呼び出し
	ret	retq	リターン(near用)
		Iretq	リターン(far用)
	ret imm16	retq \$10	リターン、 $%rsp += imm16$

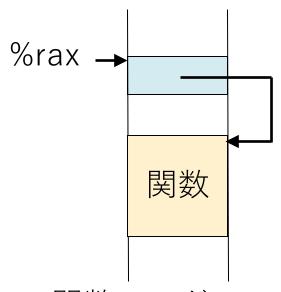


call命令による間接呼び出し(1)

call *%rax



関数のアドレスを レジスタが保持 call *(%rax)



関数のアドレスを メモリが保持



call命令による間接呼び出し(2)

```
int add5 (int n)
{
    return n + 5;
}

int main (void)
{
    int (*fp)(int n);
    fp = add5;
    return fp (10);
}
```

変数fpの型は関数ポインタ. その関数の引数はint型であり, 返り値の型もint型.

```
.text
.globl _main
.p2align 4, 0x90
_main:
pushq %rbp
movq %rsp, %rbp
subq $16, %rsp
movl $10, %edi
leaq _add5(%rip), %rax
movl $0, -4(%rbp)
movq %rax, -16(%rbp)
callq *-16(%rbp)
addq $16, %rsp
      %rbp
popq
retq
```

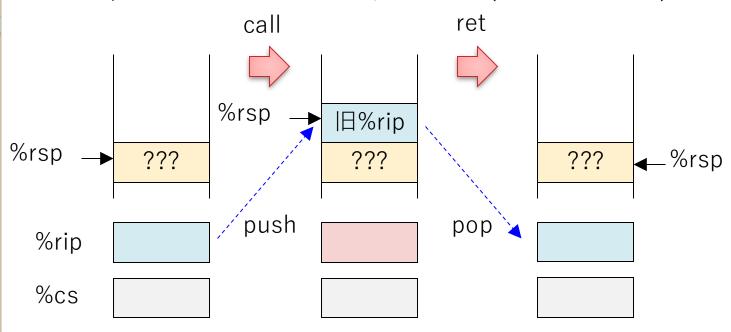
関数ポインタを使うと、call命令は間接呼び出しになる.



call, ret, enter, leave (2)

farの場合は説明しない

• call/ret のスタックの使い方(nearの場合)



- スタックに積んだ%ripの値(旧%rip)を 戻り番地(return address)とも呼ぶ。
- スタックを使うことで、呼び出した順序と逆順にリターンできる。
- nearの場合は,%csの値は変化しない.



call, ret, enter, leave (4)



- enterはスタックフレームを作る.
 - 。 *imm8* はネストレベル. *imm16* はスタックフレームのサイズ.
 - 。 GCCは(遅いので)enter命令を使わない.
- leaveはスタックフレームを解放する.

	文法	例	説明
	enter imm16, imm8	enter \$32, \$0	pushq %rbp; movq %rsp, %rbp; subq \$32, %rsp
0000000	leave	leave	%rsp=%rbp; popq %rbp

C言語だとimm8は常にゼロ(入子関数が無いから)



enterは遅い

```
#include <stdio.h>
#include <stdint.h>
                                      rdtscは64ビットのタイムスタンプカウンタを読む命令.
#define MAX (10000)
                                      CPU起動時からの全サイクル数をカウント. Pentium以降.
uint64 t rdtsc (void) {
 uint64_t hi, lo;
 asm volatile ("rdtsc":"=a"(lo), "=d"(hi));
 return ((hi << 32) | Io);
int main (void) {
  uint64_t t1, t2, t3; int i;
  t1 = rdtsc();
  for (i = 0; i < MAX; i++)
    asm volatile (
       "enter $32, $0; leave");
  t2 = rdtsc():
  for (i = 0; i < MAX; i++)
    asm volatile (
       "pushq %rbp; movq %rsp, %rbp;"
       "subg $32, %rsp; leave");
  t3 = rdtsc();
  printf ("%||u\n%||u\n", t2-t1, t3-t2);
                                              2024年度・30
```

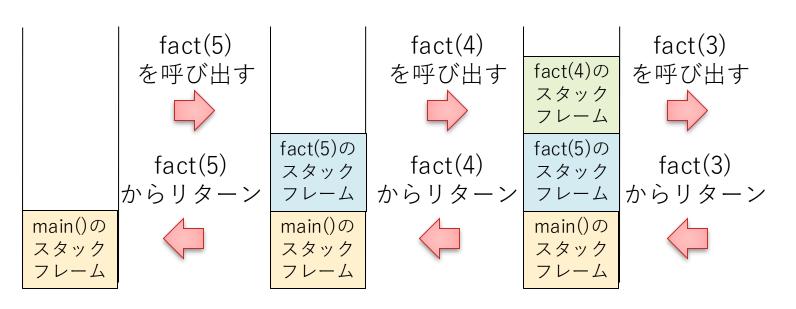
```
% gcc -00 enter.c
% time ./a.out
118582
52842
0.000u 0.000s 0:00.00
```

```
約2倍遅い
(以前は約15倍だった)
```



スタックフレーム (stack frame) (1)

- 関数呼び出し1回分のデータ. スタック上に配置.
 - 。局所変数,引数,返り値,戻り番地,退避したレジスタの値 などを含む.
- 関数を呼び出すとスタックフレームをスタックに積み、 リターンするとスタックから取り除く。





caller & callee

- 関数Aが関数Bを呼び出すとき,
 - 。 関数Aを caller (呼び出す側),
 - 。 関数Bを callee (呼び出される側), という.





レジスタの退避と回復

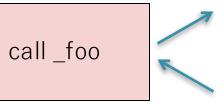
- 関数呼び出しではスタックへのレジスタ退避が必要。
 - レジスタの個数は有限でごく少ないから。
- caller側で退避・callee側で退避の2つの方法あり.

caller側で退避

callee側で退避

pushq %reg call _foo popq %reg

%regを破壊



pushq %reg %regを破壊 popq %reg



caller-saveレジスタと callee-saveレジスタ

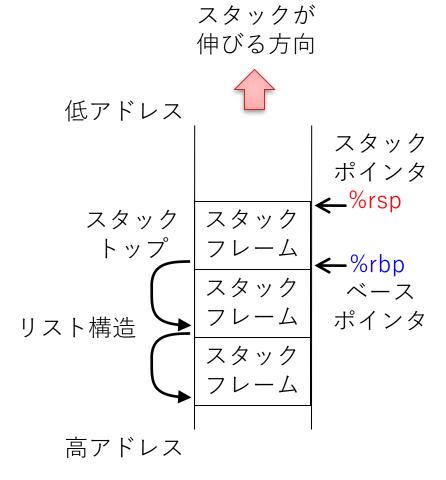
- caller-saveレジスタ = caller側が退避するレジスタ.
 - 通常、x86-64では%rax、%rcx、%rdx、%rdi、%rsi、%r8 ~ %r11
- callee-save レジスタ = callee側が退避するレジスタ.
 - 。 通常,x86-64では %rbp,%rsp,%rbx,%r12 ~ %r15

ABIが定める事項



スタックフレーム(2)

- %rspと%rbp
 - x86-64では、%rspと%rbpが、 スタックトップのスタック フレームの両端を指す。
 - そうなるように、関数呼び出し・ リターン時に調整する。
- 連結リスト (linked list)
 - 各スタックフレームは 連結リストとして接続。

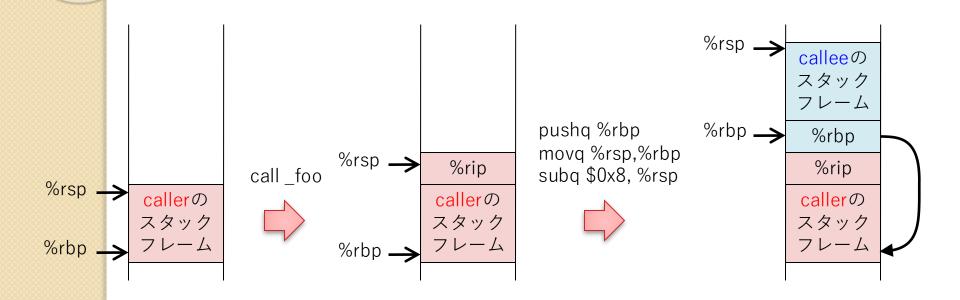


注:-fomit-frame-pointer (Linuxでは -fno-frame-pointer) オプションを使うと, %rbp はベースポインタではなく汎用レジスタとして使われる. ライブラリ関数であるある.



スタックフレーム (3)

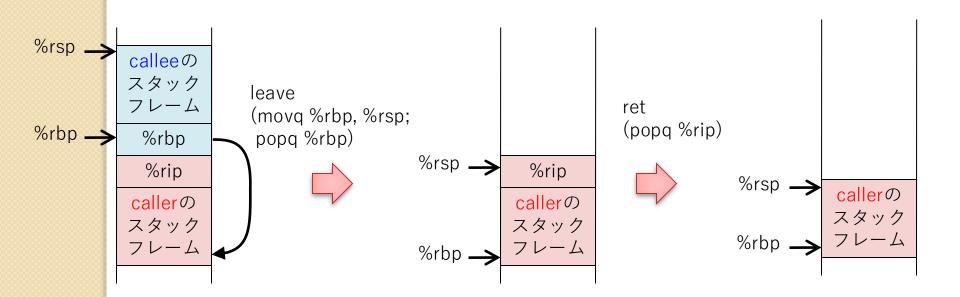
スタックフレームの作成





スタックフレーム (4)

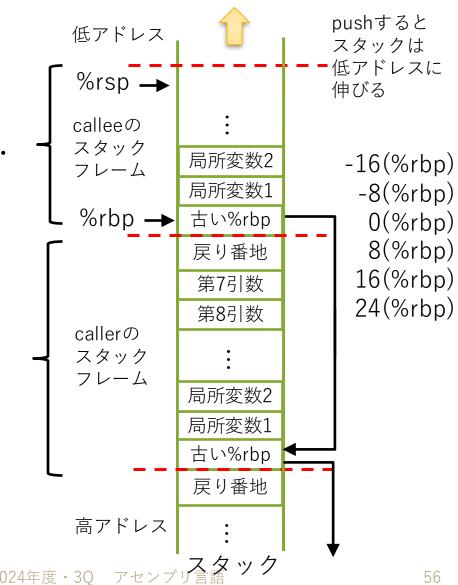
スタックフレームの破棄





スタックレイアウト (stack layout)

- ABIや状況により異なる
 - 。 例:スタックにレジスタを退避
- 引数は逆順にスタックに積む。
 - 。 必要ならパディングを入れる.
- 自動変数と第7引数以降は %rbpを使ってアクセス。
 - 例:8(%rbp), -8(%rbp)
- レジスタの役割
 - 。 %rsp: スタックポインタ
 - 。%rbp:ベースポインタ
 - 。 %rax: 返り値 (スタック併用も)





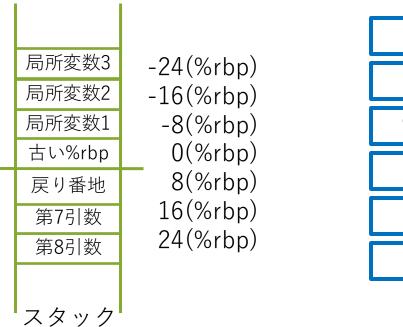
関数呼び出し規約 (calling convention)

- ABIが定める, callerとcallee間のお約束.
 - 。 引数の渡し方,
 - スタックフレームのレイアウト,
 - レジスタの役割,
 - 。caller-saveレジスタとcallee-saveレジスタ, など.
- プラットフォーム毎に異なる.
 - 。 間違うとプログラムは正しく動作しない(クラッシュする).
 - 。GCCでは__attribute__構文で関数呼び出し規約を指定可能.

```
void foo1 () __attribute__ ((stdcall));
void foo2 () __attribute__ ((cdecl));
void foo3 () __attribute__ ((fastcall));
```



引数の渡し方 (AMD64 ABI)



%rdi第1引数%rsi第2引数%rdx第3引数%rcx第4引数%r8第5引数%r9第6引数



add5.s 早わかり

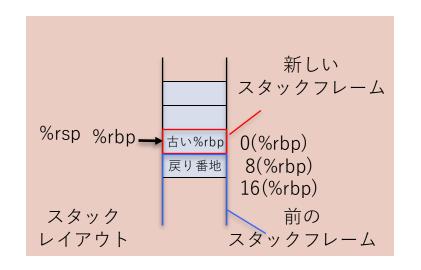
add5.s

```
.text
.globl _add5
_add5:
_add5:
pushq %rbp
movq %rsp, %rbp
addq $5, %rdi
movq %rdi, %rax
popq %rbp
retq
```

```
以降を.textセクションに出力.
このラベルをグローバル(大域)にせよ.
ラベル(アドレスは自動的に計算).
%rbpの値をスタック上に退避.
%rbp = %rsp
%rdi += 5 %rdiは第1引数n
%rax = %rdi
スタックフレームを破棄.
```

popl %rip (リターン)

- •ドット記号 (.) で始まるのはアセンブラ命令.
- •ドル記号(\$) は定数(即値).
- •パーセント記号(%)はレジスタ.
- •コロン記号(:)で終わるのはラベル.
- •8(%rbp) は C言語では *(%rbp+8) の意味.



long add5 (long n){
 return n + 5; }



prologue=序幕, 前口上 epilogue=終幕, 納め口上

典型的な関数プロローグと関数エピローグ

関数プロローグ

pushq %rbp

movq %rsp, %rbp

pushq %rbx

pushq %r12

pushq %r13

subq \$28, %rsp

必要なサイズは 関数ごとに異なる

関数エピローグ

addq \$28, %rsp

popq %r13

popq %r12

popq %rbx

leave

retq

新しいスタックフレームを作成

callee-saveレジスタを

スタック上に退避

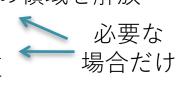
必要な 場合だけ

スタックフレーム上に領域を確保 (自動変数や引数のための領域など)

自動変数や引数などのための領域を解放

スタック上に退避していた callee-saveレジスタを回復

スタックフレームを破棄



leave=movq %rbp, %rsp; popq %rbp



今の macOS環境では実行できない

一昔前のGCCが吐くコード. 引数をpushするので自然.

典型的な関数呼び出し(1)

```
void foo (int a, int b, int c);
                                           subl
                                                   $4, %esp
void foo2 (void)
                                                   $3333
                                           pushl
                                                   $2222
                                           pushl
  foo (1111, 2222, 3333);
                                           pushl
                                                   $1111
                                           call
                                                   foo
% gcc -mtune=i386 -static -S foo.c
                                           addl
                                                   $16, %esp
                       %esp —
                                1111
                                2222
                                       fooをコールし、
                 引数を積む
                                3333
                                          後片付け
                              パディング
                               現在の
                      %ebp → フレーム
```

Mac OS XのABIが、関数呼び出し時にスタックポインタが16バイト境界を指すことを要求するのでパディングが入っている



最近のGCCが吐くコード. 引数をレジスタにセット.

典型的な関数呼び出し(2)

```
movl $3333, %edi
                                          movl $2222, %esi
void foo (int a, int b, int c);
void foo2 (void)
                                          movl $1111, %edx
                                          callq _foo
  foo (1111, 2222, 3333);
                                             caller-saveレジスタ
                                            なので必要なら退避と
% gcc –S foo.c
                                                復旧は必要
                                                       %edi
                                                                ????
                                    1111
                           %edi
%edi
                                                       %esi
                                                                ????
                           %esi
                                    2222
%esi
                  引数を
                                                       %edx
                                                                ????
                           %edx
                レジスタに
                                    3333
%edx
                                            fooをコール,
                  セット
                                            後片付け不要
                                                      %rsp →
                                                               現在の
                                  現在の
%rsp →
         現在の
                                                      %rbp →
%rbp → フレーム
                                              第7引数以降は(pushではなく)
```

2024年度・3Q アセンブリ言語

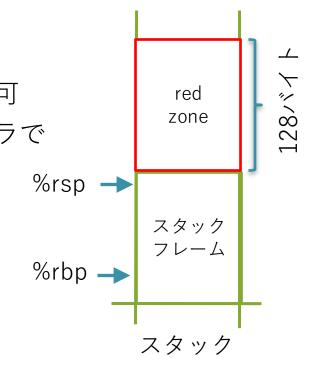
62

mov でスタック上にセット



red zone

- 通常は%rspを動かして局所変数等の場所を確保.
 - 。確保: subq \$16, %rsp
 - ∘ 解放:movq %rbp, %rsp
- red zone は右図の場所
 - 。 %rsp-1 ~ %rsp-128 の領域
 - 局所変数や一時データ置き場に使用可
 - シグナルハンドラや割り込みハンドラで 破壊されない
- red zoneを使うと上記2命令を 使わずに済む→高速化





Cからアセンブリコードを呼び出す

sub.s

```
.text
.globl _sub
_sub:
pushq %rbp
movq %rsp, %rbp
subq %rsi, %rdi
movq %rdi, %rax
leave
ret
```

main.c

```
#include <stdio.h>
int sub (int, int);
int main (void)
{
   printf ("%d\forall n",
        sub (23, 7));
}

% gcc main.c sub.s
% ./a.out
16
%
```

ラベルの先頭にアンダースコア(_) がつくかどうかはプラットフォーム依存.



アセンブリコードからCを呼び出す

main.s

```
.text
.globl _main
_main:
  pushq %rbp
  movq %rsp, %rbp
  movq $23, %rdi
  movq $7, %rsi
  call _sub
  leave
  ret
```

sub.c

```
int sub (int a, int b)
{
  return a - b;
}
```

```
% gcc main.s sub.c
% ./a.out
% echo $status
16
%
```

main関数の返値は終了コード(8ビット)として参照可能. csh系では \$status, sh系では \$? というシェル変数に格納.



アセンブリコードからprintfを呼び出す

```
.data
L fmt:
.ascii "%d\n\text{10}"
.text
.globl _main
main:
 pushq %rbp
 movq %rsp, %rbp
 leaq L_fmt(%rip), %rdi
 movq $999, %rsi
# pushq $888
 movb $0, %al
 call _printf
 leave
 ret
```

```
% gcc foo.s
% ./a.out
999
%
```

printf ("%d¥n", 999); を呼ぶ。 第1引数は文字列定数の先頭番地。

この文字列は .textセクションに 置いても大丈夫

このコメントを外すと Segmentation fault になる. %rspの16バイト境界制約に 違反するため

- ABIをちゃんと満たせば,呼び出せる.
 - 。謎なこともあるので、GCCの出力を真似するのが吉.
- %alは隠し引数で、使用するベクタレジスタの数.

可変長引数の場合必要



おなじみの階乗計算

fact.s を読む(1)

```
.text
.globl _fact
       4, 0x90
.p2align
fact:
 pushq %rbp
 movg %rsp, %rbp
 subq $16, %rsp
 movl %edi, -8(%rbp)
 cmpl $0, -8(%rbp)
 jg LBB0_2
 movl $1, -4(%rbp)
jmp LBB0 3
LBB0 2:
 movl -8(%rbp), %eax
 movl -8(%rbp), %ecx
 subl $1, %ecx
 movl %ecx, %edi
```

```
int fact (int n)
{
    if (n <= 0) {
       return 1;
    } else {
       return n * fact (n - 1);
    }
}</pre>
```

```
第1引数 n を -8(%rbp)にコピー
n <= 0 の比較
n > 0 なら else節 (LBB0_2)へジャンプ
返り値1を-4(%ebp)に格納
```

```
%eax = n
%ecx = n
%ecx -= 1 (n-1になる)
第1引数 %edi = n - 1
```



おなじみの階乗計算

fact.s を読む(2)

```
int fact (int n)
{
    if (n <= 0) {
       return 1;
    } else {
       return n * fact (n - 1);
    }
}</pre>
```

```
%eax, -12(%rbp)
 movl
 callq fact
 movl -12(%rbp), %ecx
       %eax, %ecx
 imull
       %ecx, -4(%rbp)
 movl
LBB0 3:
       -4(%rbp), %eax
 movl
       $16, %rsp
 addq
       %rbp
 popq
 retq
```

```
%eaxを -12(%rbp)に退避
返り値は %eaxに格納されてるはず
退避した-12(%rbp)の値を%ecxに回復
n * fact(n-1)を計算
計算結果(返り値)を-4(%rbp)に格納
計算結果(返り値)を%eaxに格納
```



補足(1)

- 原則,即値・変位は32ビットまで,64ビットは無い。
 - 。例:addq \$0x1122334455667788, %rax NG
 - 。 例外:movq \$0x1122334455667788, %rax OK
 - 32ビットの即値は64ビットの演算前に64ビットに符号拡張
 - 例:OxFFFFFFF は,OxFFFFFFFFFFFF になる



補足(2)

32ビット演算の場合、32ビットの計算結果を ゼロ拡張して64ビットレジスタに格納。

```
.text
.globl _main
_main:
movq $0x1122334455667788, %rax
addl $1, %eax
ret
```